アメリカの庭園／庭園のアメリカ

鷲津浩子

はじめに

アメリカの庭園を語るとき、優れた先行研究を忘れてはならないだろう。

たとえば、R・W・B・ルイス（R. W. B. Lewis）の『アメリカのアダム』（*The American Adam*）(1955)では、アメリカへの植民者は大西洋を渡ることによって「純化（purify）」され無垢の状態で「新大陸」に向き合うとする。ここでのアメリカは「エデンの園」であり、植民者は堕落前のアダムのように何の過去も背負うこともなく新しい生を始めることができる。

レオ・マークス（Leo Marx）の『庭園のなかの機械』（*The Machine in the Garden*）(1964)では、産業革命によって「エデンの園」にもたらされた変化が論じられる。その象徴としての蒸気機関車は、一方では庭園の静謐を破る騒音や煤煙をもたらすが、他方では庭園を拡張していく開拓の尖兵ともなりうる。この機械に対する畏敬の念をマークスはtechnological sublimeと呼んでいる。

マイラ・ジェーレン（Myra Jehlen）の『アメリカン・インカーネーション』（*The American Incarnation*） (1989)は、アメリカという国の概念が広大な「処女地」によって形成されたことを指摘する。つまり、「誰もいない誰のものでもない土地」を開拓することが国家形成と置き換えられているのだ。

もちろん、アメリカには植民以前から暮らしている人たちがいたし、ヨーロッパの過去との決別はたやすくはなかった。庭園を拡張するための西進運動は「進歩」の名のもとに破壊と搾取をもたらした。

だが、アメリカの「庭園」を語るとき、アメリカという概念じたいが荒野と文明の中間地帯としての庭園を想定していることも忘れてはならないだろう。この意味で、アメリカはヴォルテール（Voltaire）の『カンディド』（*Candide*）(1759)の庭園の比喩、「庭を耕さなくてはならない」（”Il faux cultiver notre jardin”）を具現化したものとなっている。

1.「庭園」の始まりと展開

では、庭園としてのアメリカはいつごろ創出されたのか。

たとえば、1620年にピルグリム・ファーザーたちがマサチューセッツ州プリマスに上陸したとき、その植民地はプリマス・プランテーション（Plymouth Plantation）と呼ばれた。ここでのプランテーションが、アメリカ南部の荘園制でも、帝国主義時代の植民地でもないことに注意しよう。それは、文字通り、民を植える（plant）あるいは植えかえるという意味での「植民」となっているのだ。

あるいは、ボストン上陸前にアラベラ号船上で行った初代マサチューセッツ総督ジョン・ウィンスロップ（John Winthrop）の演説「キリスト教愛のモデル」（“A Model of Christian Charity”）（1630）を思い浮かべてもいいだ

ろう。ウィンスロップはこの演説の最後で、彼らが築く新しい町は「丘の上の町」(“City upon a Hill”)となることを宣言する。聖書からの引用になる表現は、キリスト教の精神によって運営される町が世界中から仰ぎ見られる模範となることを示すのだが、それはまた「丘」という既存の自然に「町」という人工物を構築することを意味する。

Seal of the Massachusetts Bay Colony

同様の発想は、マサチューセッツ湾植民地の印璽にも見られよう。ネイティブ・アメリカンの台詞「ここに助けに来て」(“Come Over and Help Us”)は、あたかも植民者たちの開拓を促しているようではないか。もちろん、迎える側には、迷惑なだけではなく、災難でもあったのだが。

実際、マサチューセッツの開拓は、森林伐採から人工庭園へと推移している。

森林に覆われた未開の地は、たとえばチャールス・ブロックデン・ブラウン(Charles Brockden Brown)の『ウィーランド』(*Wieland*)(1798)に、ナサニエル・ホーソン(Nathaniel Hawthorne)の「若いグッドマン・ブラウン」(“Young Goodman Brown”)(1835)や『緋文字』(*The Scarlet Letter*) (1850)に、昼なお暗く謎に満ちた場所として描かれている。

この豊富な森林資源は初期の時計製造にも用いられ、金属部品に木製の箱という「おじいさんの時計」の形式を生み出した。これは、アメリカ独自の産業形式のもとになっている。というのも、ヨーロッパの時計産業が、徒弟制による金属製の時計の注文生産であったのに対し、人的資源の少ないアメリカでは機械によって人手を省くために交換可能な部品を使った大量生産が行われたのだが、内部と外装の異なる時計は分業に適していたからである(Hindle)。こうして、あっという間に森林は伐採され、ついには木材調達をかつてマサチューセッツの属州だったメインに求めることになる。この辺りの事情は、ヘンリー・デヴィッド・ソロー(Henry David Thoreau)の『メインの森』(*The Maine Woods*) (1864、死後出版)にも見られる。

ところで、森林に覆われた未開の地はまた、ヨーロッパのナチュラル・ヒストリーから見れば、珍品の宝庫だった。南北アメリカ原産の固有種には、七面鳥、バイソン、プレーリードッグ、シロイタチ、ヘラジカ、グリズリーベア、ピューマといった動物や、インゲン豆、ホオズキ、ズッキーニ、カボチャ、トマト、トウモロコシ、ピーマン、イチゴ、ジャガイモ、ピーマン、唐辛子、ヤーコン、カカオ、サツマイモ、アサイ、アセロラ、アボカド、タバコといった食物になる植物があった。このうち、七面鳥とトウモロコシは、初期ピューリタンたちが生き延びた食材であるとともに、バーボンの銘酒「ワイルド・ターキー」としてその存在を主張している。

もちろん、当時のナチュラル・ヒストリーの本場はヨーロッパで、アメリカは主にフィールドワークを担当する原産地に過ぎなかった。しかも、植物の移動による環境破壊に対してはなはだ無関心でもあったから、数多くのアメリカ固有種が大西洋を渡ってヨーロッパの富裕層や植物園へと移植された。この代表例が、フィラデル

フィア郊外にあったジョン・バートラム（John Bartram）の種苗園（nursery）で、ここで育てられたアメリカ原産の植物は、クエーカー・ネットワークを通じて、たとえばイングランドのピーター・コリンソン（Peter Collinson）へと届けられた。コリンソンはまた、ベンジャミン・フランクリン（Benjamin Franklin）の協力者でもあり、フィラデルフィアのアメリカ哲学協会（American Philosophical Society）設立（1743）に尽力している。

ジョン・バートラムの息子ウィリアム・バートラム（William Bartram）は、父の跡を継いだばかりでなく、新種を求めてアメリカ南東部を旅した記録を残している。この記録は通常『旅行記(*Travels*)』(1791)と呼ばれるが、その正式タイトルがその内容をほぼ網羅している(*Travels Through North & South Carolina, Georgia, East & West Florida, the Cherokee Country, the Extensive Territories of the Muscogulges, or Creek Confederacy, and the Country of the Chactaws; Containing an Account of the Soil and Natural Productions of Those Regions, Together with Observations on the Manners of the Indians*)。大きな事件が起きるでもなく、系統だった旅程も描写もない記録は、退屈なまでに即物的だ。ちなみに、この旅行中にアラタマハ河畔で発見されたとされるフランクリニア・アラタマハ(*Franklinia alatamaha*) の花が、再発見されることなく、その図版だけが海賊版によって改変を繰り返され原物かとは似ても似つかないものに変わったことについては、クリストファー・アームシャー（Christopher Irmscher）が具体的な図版をとりあげて論じている。

ヨーロッパのクロゼット・ナチュラリストに対するアメリカのフィールド・ナチュラリストという図式は、J・ヘクター・セント・ジョン・ドゥ・クレヴクール（J. Hector St. John de Crèvecoeur）の『アメリカの農夫からの手紙』（*Letters from an American Farmer*） (1782) にも見られる。アメリカ農夫ジェームズからイングランドのF・B氏（Mr. F. B）.への書簡集という形式は、たとえば古くは王立協会の報告に見られるように、具体例の収集は現地で、その理論化はロンドンやパリでという当時のナチュラル・ヒストリーに共通してみられるものだった。この本の第3章は「アメリカ人とは何か？」（“What is an American?”）と題され、ヘブリディーズのアンドリューの挿話が入っている。これは、スコットランドのヘブリディーズ島出身のアンドリューがアメリカに「移植」され、根付く姿を描いたものである。ここでも、新しい外来種が自ら開拓した庭で繁殖するという、あのアメリカの神話が繰り返されている。

だが、ヨーロッパ・ナチュラル・ヒストリーの方法論を使いながらも、その泰斗パリ植物園長ビュフォン伯ジョルジュ＝ルイ・ルクレール(Georges-Louis Leclerc, Comte de Buffon)の説に異を唱えたアメリカ人もいた。後のアメリカ第三代大統領トマス・ジェファソン（Thomas Jefferson）である。ビュフォン伯の「新大陸劣化説」は、新旧大陸の動物を比較し、両大陸に存在するものは旧大陸の方が優秀であり、旧大陸から新大陸へ移動したものは劣化の道をたどるとしたものだが、ジェファソンは『ヴァージニア州に関する覚書』（*Notes on the State of Virginia*） (1783) に両者を比較する表を挿入し、この説に反駁しようとした。そもそもこの本は移民招聘のためのアンケートに答える形式で書かれた本なのだが、第4章の「産物：鉱物、植物、動物」（Productions mineral vegetable and animal）が他の章に比べて異様に長くなっている。というのも、ジェファソンはここで自然資源だけでなく、この大陸に居住する人々についても言及しているからだ。独立から間もないのにワシントンやフランクリンらの偉人を生み出していること、またネイティヴ・アメリカンには優れた特性があることを力説する。もちろん、ヴァージニアの大荘園主で大勢の奴隷をつかっていた男が何を言うかという反論も可能だろう。ジェファソンはまた、駐フランス公使時代に、禁止されていたにもかかわらず、イタリアからコメをコートのポケットに隠して密輸入している。外交官特権は、今も昔も変わらないら

しい。

ヨーロッパのクロゼット・ナチュラリストに対するアメリカのフィールド・ナチュラリストという図式はまた、アメリカ小説の成り立ちとも関連している。レスリー・フィードラー（Leslie Fiedler）の『アメリカ小説の愛と死』（*Love and Death in the American Novel*）(1960) によれば、小説（ことにゴシック小説と感傷小説）というヨーロッパ市民社会の産物を、その形式だけを借りて、アメリカの事物をはめこんだものが、たとえばブラウンの『ウィーランド』ということになる。逆に言うならば、ヨーロッパの読者にとってのアメリカ小説は、バートラムの苗木と同様に、異国趣味をもたらしてくれるものと認知されていたことになるのだ。

だが、この図式が崩れるときがくる。それは、アメリカに産業革命がおこり、それにともなう都市化が進んだことによってもたらされる。

2. 産業革命後の「庭園」

アメリカ産業革命の特徴は、交換可能な部品による大量生産と宣伝による消費者の開拓である。徒弟などの人手があるギルド制のヨーロッパとは異なり、アメリカでは人的資源の欠如を機械による補おうとした。だが、機械には均一な品物しか作れず、客の注文に合わせるカスタム・メイドはできない。そこで、たとえば同じ型紙のシャツを大きさと色を変えて大量生産することになる。

キングズ・チャペル埋葬地（ボストン）

こうして大量生産された品物を売るには、顧客を待っているだけでは不充分だ。積極的に消費を促すために、宣伝が必要になる。こうして、製品管理や宣伝のための事務職の重要性が増し、その事務職が通勤する事務所が都市に集中するようになった。

この都市化の流れの中で、「庭園」もまた変貌を遂げる。荒野と文明の中間地帯だった「庭園」は、一方でフロンティアに沿って西部の荒野へと拡張していくのと同時に、他方では都市の中にとりこまれ、都市の勤め人のための余暇の場となる。

後者の代表が、ボストン郊外に造成されたマウント・オーバン墓地（Mount Auburn Cemetery）だろう。1831年に開園したとき、その中心人物はマサチューセッツ園芸協会初代会長のヘンリー・アレクサンダー・スキャメル・ディアボーン（Henry Alexander Scammell Dearborn）、「テクノロジー」という言葉を「科学理論を実用技芸に応用したもの」（“application of science to useful arts”）と再定義した医師ジェイコブ・ビゲロー（Jacob Bigelow）、そして景観デザイナーのアレクサンダー・ワッズワース（Alexander Wadsworth）（詩人ヘンリー・ワッズワース・ロングフェロー（Henry Wadsworth Longfellow）のいとこ)であった。この3人の人選にも、この墓地の思想、すなわち産業革命下の都会人にとって気晴らしとなる樹々に囲まれた景観を作り出そうとする意図が見えるだろう。ちなみに、現在のマウント・オーバン墓地には、700種5500本の樹木が植えられていて、なかには原産地では絶滅危機のものまで含まれている。

では、このような墓地の形態を可能にしたのは何だったのだろう。ホーソンの『緋文字』冒頭で言及されている墓地はキングズ・チャペルのそれで1630年代のものだが、厳密に言えば、そこは「埋葬地(burying ground)」であって「墓地(cemetery)」ではない。前者がまったく即物的であるのに対して、後者はマウント・オーバン墓地と同時に使われるようになった表現で、もともと「眠る場所」というギリシャ語から派生したものだった。

ここには、死生観の変化が見られる。つまり、死は「永遠の眠り」として、避けられないまでも、恐ろしいものではなくなったし、アン・ダグラス（Ann Douglas）の言い方を借りるならば、身内によって弔う身近なもの（domestic）となったのである。それはまた、都市化による旧来のコミュニティ崩壊と個々人や家族単位のプライヴァシーの尊重をも意味していた。

マウント・オーバン墓地の「小さなエラ」と両親の墓

だが、マウント・オーバン墓地は墓参者たちのためだけにあったわけではない。ハーバード大学のあるケンブリッジとウォータータウンにまたがる広大な敷地は、ボストン市内からも至近距離であり、都市の生活に疲れた人たちが散歩に訪れる場所でもあった。意図的に曲がった道は、墓参者たちのプライヴァシー保護だけでなく、散歩者にとっての景観を意識したものだった。

このような散歩目的の人たち目当てに、ガイドブックが刊行されている。それには、たとえば上の「小さなエラ」のような彫刻のある場所が、観光スポットとして、その絵とともに紹介されている。

このほかにも、死や死ぬことに関する詩や散文を収録した文芸集がついていることもあり、たとえばウィリアム・C・ブライアント（William C. Bryant）の「老人の葬式」（“The Old Man’s Funeral”）やホーソンの「リリーの探し物」（“The Lily’s Quest”）が収録されているガイドブックもある。以下は、コーネリア・W・ウォルター（Cornelia W. Walter）の『図版マウント・オーバン』（*Mount Auburn Illustrated*）（1847）に掲載されているブライアント作といわれる詩で、都会人の散歩道としてのマウント・オーバン墓地をうたったものとなっている。

Mount Auburn
Mount Auburn
Here I have ‘scaped the city’s stifling heat,
Its horrid sounds, and its polluted air;
And, where the season’s milder fervors beat,
And gales that sweep the forest borders, bear
The song of birds and sound of running stream,
Am come awhile to wonder and to dream

意図的に「田舎風」に設計されたマウント・オーバン墓地の成功は、都市造園家アンドリュー・ジャクソン・ダウニング（Andrew Jackson Downing）にインスピレーションを与え、大都市に市民の憩いの場としての公園（public park）を作る運動へと発展する。さらに、ダウニングの計画は最初にランドスケープ・アーキテクト（landscape architect）と正式に名乗ったフレデリック・ロー・オルムステッド（Frederick Law Olmsted）に受け継がれ、たとえばニューヨークのセントラル・パークに結実

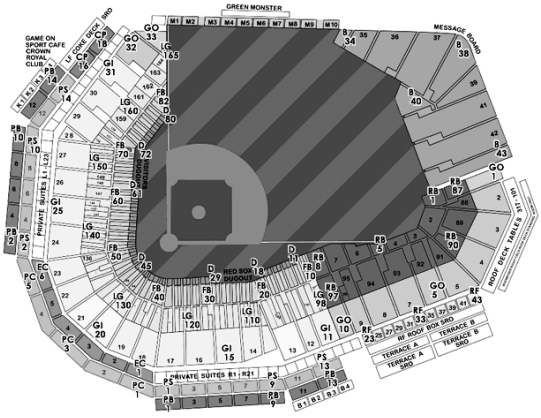
郊外の散歩道としてのマウント・オーバン墓地

している。

都市のなかの自然という発想はまた、アメリカの国民的娯楽にも浸透している。1839年、ニューヨーク州のクーパーズタウンでアブナー・ダブルデイ（Abner Dou-

旧ヤンキー・スタジアム(1923)

bleday）によって発明されたとされる野球の起源は神話だが、そもそも都市労働者たちが休み時間に空き地でボール投げをしたことから始まったと考えられる。都会のスポーツ、気晴らしとしての野球は、たとえば球場をボール・パーク（ball park）と呼ぶことからも窺えよう。これもまた、公園なのだ。古い球場のなかには都市の空き地に造られたため、ゆがんだ形をしたものがある。たとえば、旧ヤンキー・スタジアムは右翼までの距離が短く、したがってヤンキースは左の強打者を揃え、ベーブ・ルースをホームラン王にした。ボストンのフェンウェイ・パークは、左翼が狭いので、本塁打が出すぎないように巨大なフェンスを作ったが、この「グリーン・モンスター」のおかげで、フライの多い右打者に有利になっている。



フェンウェイ・パーク(1912)

こうして、人跡未踏の土地をエデンの園に見立てることで始まったアメリカの庭園／庭園のアメリカは、都市の発展とともに、都市のなかの自然を人工的に造りだす公園としてその形態を変えて現在まで生き延びている。

＜図版・写真ほか＞

Seal of the Massachusetts Bay Colony from Wikipedia (public domain)

Photos of King’s Chapel Burying Ground and the Mount Auburn Cemetery taken by the author

Yankee Stadium (1923) from Wikipedia (public domain)

Fenway Park (1912) , from ESPN HP , Boston Red Sox http://espn.go.com/mlb/team/stdium/_/name/bos/boston-red-sox 20160116

＜参考文献＞

Bartram, William. *Travels Through North & South Carolina, Georgia, East & West Floria, the Cherokee Country, the Extensive Territories of the Muscogulges, or Creek Confederacy, and the Country of the Chactaws; Containing an Account of the Soil and Natural Productions of Those Regions, Together with Observations on the Manners of the Indians.* 1791. Dover, 1955. Print.

Brown, Charles Brockden. *Wieland; or, the Transformation, an American Tale.* 1798. Kindle.

Crèvecoeur, J. Hector St. John de. *Letters from an American Farmer.* 1782. Oxford UP, 1999. Print.

Douglas, Ann. *The Feminization of American Culture.* Knopf, 1977. Print.

Fiedler, Leslie A. *Love and Death in the American Novel*. 1960. Dalkey Archive, 1998. Print.

Hawthorne, Nathaniel. *The Scarlet Letter*. Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne I. 1963. Ohio State UP. Print.

---. "Young Goodman Brown." *Mosses from an Old Manse*. Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne X. Ohio State UP, 1974. Print.

Irmscher, Christopher. T*he Poetics of Natural History: From John Bartram to William James*. Rutgers UP, 1999. Print.

Jefferson, Thomas. *Notes on the State of Virginia.* U of North Carolina P, 2011. Print.

Jehlen, Myra. *The American Incarnation: The Individual, the Nation, and the Continent.* Harvard UP, 1989. Print.

Lewis, R. W. B. *The American Adam.* U of Chicago P, 1955. Print.

Marx, Leo. *The Machine in the Garden: Technology and the Pastoral Ideal in America.* Oxford UP, 1964. Print.

Thoreau, Henry David. *The Maine Woods.* The Writings of Henry D. Thoreau. Princeton UP, 2004. Print.

Walter, Cornelia W. *Mount Auburn illustrated. In highly-finished line engraving, from drawings taken on the spot, by James Smillie. With descriptive notices by Cornelia W. Walter*. 1847. Ulan P, 2012. Print.

Winthrop, John. "A Model of Christian Charity." 1630. http://winthropsociety.com/doc_charity.php 20160214